九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近世女流紀行文学の性格

板坂，耀子
熊本商科大学講師

https://doi.org/10.15017/12117

出版情報：語文研究. 41, pp.11-21, 1976-03-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

近世女流紀行文学の性格

板坂耀子

その様な条件下に書かれた女性紀行は、どの様な特色を備えどの様に評価されたか。代表的なものを含む幾つかの作品にふれて、検討したい。

一、はじめに

「国書総目録」中、作者名が女性と確認できる近世紀行[註1]は六十余編である。だが、作者不明の作品中にも内容から女性作と断定できるものはあろうし、諸九尼「筑紫紀行」あしやの栄子『不知火日記』等の様に現存が確認できないもの、興正院『あつまのゆめ』[註2]たき女『つくしまうて』[註3]等の様に現存しても目録に見えないものが各々多数あることを思うと、この数字は一つの目安にしかすぎまい。とはいえ、それは同様に「国書総目録」中から抜粋した男性紀行（近世のみ）の五十分の一にも満たぬ。板行された作品は同目録及び近世の書籍目録類[註4]で見る限り「帰家日記」「伊香保の道ゆきぶり」[註5]「庚子道の記」等著名な作品以外には数点しかない。

近世文学全般において女性の活躍は華々しいものでなかった。[註6]又、紀行文学の素材となるべき旅そのものについても、女性は恵まれた条件になかった。近世の旅は娯楽化し、それを女性が楽しむことは批判された。[註7]

註

(1) 「侍女豊崎」「万女」等のように女性名としか考えられないもの、及び古香や野村望東の様に著名な女性名の作品をさす。

(2) 鹿児島県立短期大学蔵。「南九州の国文学関係資料」(二)（塩谷充夫氏・福井迪子氏・若木太一氏）で翻刻解題。

(3) 春日和男先生所蔵。

(4) 「江戸時代書林出版書籍目録集成」「享保以後大阪出版書籍目録」「近世京都出版資料」等。

(5) 岡田士閑妻「奥のあら海」税所敦子「心つくし」等。

(6) 「日本女流文学史」（近世文学と女流」（神保五彌氏）に、その実状と背景が述べられる。

(7) 「女は常に心遣してその身を堅く慎み護るべし。朝は早く起き夜は遅く寝ね昼はいねずして家の内の事に心を用ひ織縫績緝怠るべからず。又茶酒など多く飲むべからず。歌舞伎、小唄、浄瑠璃などの淫れたる事を見聴くべからず。宮、寺など都て人の多くあつまる処へ四十歳より内は余に行くべからず。」（「女大

学」。当時の旅は寺社参詣が多かったし、それは特に娯楽的要素を帯びた。）

「みめかたちよき女房成共夫のことをおろかに存、大茶をのみ、物まいり遊山すきする女房を離別すべし。」（「徳川禁令考」中、「慶安二丑年二月廿六日諸国郷村江被仰出」いわゆる「慶安御触書」）

「（関所に必要な女手形を得る手続きは）厄介な事は殆ど言語道断である。それだから今切以西、気賀以西は遠州とは交通が少くて縁組等は大抵三州の方としてゐたといふ事である。此の如く頼む手続が実に厄介で、頼むでも中々許が出ない。急な要用などの時は甚だ迷惑であるが取扱の役人等は至極冷淡無情なもので、為に婦人の往来は全く己を得ぬ人許りとなって、婦人の足は甚だ重くなったのである。」（「日本交通史論」中、藤田明氏「今切渡と荒井関附女手形」）

「讃岐高松藩では、元禄の頃、領内でも特に妻子の他出は厳しく止めていたし加賀藩や米沢藩でも早くから女の他国旅行は禁止されていたがこのような地方では女性の旅は法網をくぐる犯罪行為であった。（中略）女性の遠出などは非常に困難であって、彼女等は生れながらにして旅への望みを放棄せざるを得ないような宿命に立たされていた。」（新城常三氏「庶民と旅の歴史」）

なお次の様な記述からも女性の旅の困難さがうかがえる。「予筑紫に行脚し帰国におよびしかは三宅徳義の女つねに風景の地をとひ給ふ。予が物語をき、給ひてハ婦人の事をうらみ其地に行事のかたきを悲みありて図を乞ニ給ひぬ。」（「吉備郡史」より古河古松軒『名所乃家つと』。原本は焼失。）

二、女性の旅の特色

その旅の道筋を一見すると近世女流紀行は男性のそれと大差ない。東海道を始めとして木曽路（村尾清子『岐曽路日記』[註8]清源院軌子『青葉山路』[註9]等）、瀬戸内の舟旅（『藻屑』[註10]野村望東『上京日記』[註11]等）、北海道松前から京までの長途の旅（岡田士聞妻「奥のあら海」[註12]）等、範囲も広く長途にわたる。

だが子細に見ると、少数の例外を除き[註13]、女性紀行の道筋は各作品ともほぼ同一で個人差が少いことが判明する。旅人の絶対数が男性に比して著しく少いため重複が目につく面もあるが、男性紀行に往々にして見られる、正規の道筋を外れた多彩な行跡が皆無といっていい程である。

これは註7で若干述べた如く、女性の旅の大半が旅自体を目的とせず、何らかの用件を持ったやむを得ない旅であった事と関連する。目的の土地を目ざし、予定に従い、その途中で立寄り可能な名所にのみ訪れるのが、彼女らの旅の形式だった。それは旅全体の性格を規定すると言っても過言ではない。その他にも女性である故の旅の困難は多かった。彼女らの紀行文から抜粋しよう。[註14]

第一に、いかに近世に入って旅が容易になったとはいえ、女性の旅はそれ自体不安が多かった。

「まして女ぐしたれば益本（作者の弟）もいと心ことに戒めありきて戸ざしよく固めよなどいふ」（井上通女「帰家日記」[註15]）

「かゝる山路を女の夜を凌ぎて斯行くこと誠に此御代のかしこさを思ふに又心細さもいはん方なし」（「奥のあら海」）

「従者の多からぬもはじめは嬉しと思ひしを、ふけ行くまゝに、かへりては力なき心地ぞする」（土屋斐子『たびの命毛』[註16]）

次に関所の通過がある。男性に比して検査は厳重で、手形にわずかの不備があれば留めおかれて大切な日数を費させられる。精神的負担も大きかった。

「比所にあつまより通るおんなをあらたむる関あり。其所に乗物をすへてあらためさす。かきたれ降雨なれはすたれのひまをもりて乗物のうちもいたくぬれけり。所の女の出てあらため

るもいふせくて」（『あつまのゆめ』）
「こゝも又女をあらたむる関なり。せきやの前にかこをすへて関守とものおほくなみゐて何くれとのゝしるもそらおそろしくおほつかなくおほへ侍るに上中下つゝかなくとをしけれはみな人よろこひける」（同右）
「難波にて賜りし御印、関所に奉りしに、わきあけたる少女と書きわくべき事をえしらでたゞ女とのみ書きて奉り扨御印のことばにも女とのみありければゆるし給はで空しくもとのやどりに帰りぬ。いかゞ悲しくつらくて（中略）たゞ何につけても女の身のさはりおほくはかなき事ども今さら取り集めて過すほどに明暮もおもひわかず。」（井上通女「東海紀行」[17]）
「髪筋などねんごろにかきやりつゝ見る。むくつけゞなる女の年老いぬれどすこやかにていと荒ましきが近やかにより来てだみたる声にて物うちいひかくするもこゝろづきなくいかにする事にかと恐ろし。」（「帰家日記」）
「牛の時ばかり関にいたる。山のかひにはくぎぬきしわたし関屋には弓やなぐひなどきら〳〵しう置かせたればことなき身にも胸つぶれ手足さへぞふるふ。かしこき影とたのみつる笠も扇もとられたればつくろはぬおもてにふくだみたる髪のこほれかゝりていかに見ぐるしからむと汗あえてけり。」（武女「庚子道の記」[18]）
「関に至れり。けさよりいかならんとむねつふれて思ひわつらひたるにことなく過ぬるいと嬉し。今そ人々心落居けり。」（『岐曽路日記』）
「箱根の関にて女のさほう有り。またこゝも同じさだめなる物からおのこならざらんはいかに故郷こひしともとみにかよふべきとも絶はてたりと思ふにいといみじう心ぼそう悲し。」（『たびの命毛』）
第三に女人禁制の社寺[19]が多く、参詣と名所遊覧が結合していた近世において、これは材料採取の困難を生ずるものだった。
「うちてのはまより三井寺をおかみ奉りけるにやは。女は此御寺にまうつることをゆるされすときくにも又、五しやう三せうのつみふかき身のほとをおそれて」（『あつまのゆめ』）
「爰（三井寺）に秀郷の龍宮よりもて来し鐘有とかや人に問けれはこれよりへたゝりて女人のまいらぬ所といふにちからなくてもとの道に下りぬ。」（吉見蓮子『つくしおび』[20]）
「書写の御寺にまうてんとしつれど其御山は女を禁じ給ふよし聞きて思ひ絶えつゝさらばとて広峯に参りたり。」（荒木田麗女『初午の日記』[21]）
「あなたこなた見めぐりていまだ午のときなりぬといへば書写にこゝろざしおもむきぬ。（中略）いづこともしらぬ里々をか山をゆく。（中略）やう〳〵書写にいたりてのぼりぬれば女人堂あり。禁制としりせば来るまじきをあだに労せしことよとわびし。くれゆけば旅屋にやどりぬ。」（『藻屑』）
第四に、彼女らの旅の多くが目的を持った「やむをえない旅」だったことと関連するが、彼女らは旅の日程その他に関して主導権を握っていないことが多い。彼女らの意志を考慮しない予定の枠に沿って旅はすすめられ、名所を見るにしても従者に頼むしかなく、それも思うにまかせない[22]。
「せきの藤河はいつくそと問ひけれは、はるかあとにすきけ

るといふ。しらて来にけることをわひて」（『あつまのゆめ』）

「八橋は爰わたりとこそ聞きつるにといへど、従がふ者ども さ承りしは一里程あなたに沢ははたけのやうになり橋はくひばかり残りて杜若もいづちいにけん、ゆかりの色もなければ御覧すべくもなしといひしが聞きし。さる跡こそなほゆかしけれと思へどかくいへば見ずして過ぎ行きぬ。」（『東海紀行』）

「名所ときけは見まくほしといへと舟人聞も入す順風なりと帆をかけて飛かやうにゆけはちからなくて」（『つくしおび』）

「今しはし爰に眺望せむと思へといさと人々のいへは心をのこして立出る。」（『安永六年軌子紀行』[註23]）

無理な日程の為、駕中で居眠りし浅間山を見逃して残念がる『岐曽路日記』の長い述懐も、結局はこのような状況が生んだ事態なのである。時には、この様な思いのままに旅を楽しめないいらだちは、次の様に、全体の構成を明らかに乱す強い叙述すら生む。

「よろづ所を得てもてあつかふ従者なといふもの、あはれなるをも思ひやらずみやびなる心もなし。さるほどにこなたは優に思ひしみつゝ哀にもおかしうも見過しがたき所をば何とも思ひたえず追立〳〵あらがひてはしらするをまた人多くてきたなき者どもうちつどひがや〳〵と罵りがちにて酒のみ物くひなどする所こそ見るもうるせくはやう打過ねと思へばおのれはゑみ〳〵と口ひきたれ鼻いらゝきてをるぞかし。されば道行くほどもあけくれいきなきわざのみ多かれとうち〳〵のいふへきならねば女はかくはかりの事さへに心に任せぬを佛を念じつゝいとせめて後の身はおのこみあらはやとさへ思ひうつしてはて〳〵は称名をさへとなへられけり。」（『たびの命毛』）

註

(8) 宝暦八年、江戸から大阪までの木曽路の旅を中心とする紀行文。東京大学に写本が存する。紀州侯に仕えた女房作。

(9) 天明三年。熊本から江戸までの紀行で作者は肥後六代藩主細川重賢の妹。九州大学・熊本大学・熊本県立図書館に写本が存する。国書総目録に福井久蔵氏蔵本として一本を記すが未見。

(10) 作者、制作年代不詳。筑紫の藪氏の母が都に上った紀行。国会図書館に写本が存するが未見。「女流文学全集」による。

(11) 文久元年、福岡から京までの紀行。天理図書館に自筆本があるのみ（未見）。「女流文学全集」による。

(12) 松前侯夫人に仕えた女房の作。写本、板本、数点ずつ存するが未見。「女流文学全集」による。

(13) 例えば款冬園古香『西覇雑書』（刈谷図書館に写本存在）は、いささか独自の自由な行程を選んでいるし、筆者は未見だが菊舎尼『九州行』等にもその可能性はある。

(14) 紀行文を資料として使用する事には問題もある。しかし交通史・女性史の面からある程度証明できる事実である以上、彼女らの記述は実際の旅の資料とみて無理はないものと考える。

(15) 写本板本共に多く現存。内閣文庫青表紙27.0×19.0㎝の写本は末尾の良賢跋も含めて板本と随所に異同がある。蓬左文庫の写本にも板本とは若干の異同。板本は正徳六年板及びその後刷が大半と思われる。

(16) 加賀文庫蔵天保一五年片山賢写奥書の写本には君山批評が附され、これは唐橋君山の事かと附紙がある。更に冒頭に「摂雑録書抜（弘化元年）」として、土屋斐子について

「から文にある事うまくとりましへてさかしく書しものなり、おのれ□□□□内川に語りしに内川いふ此奥方のさかしき事ハ人よくしりて名高きこと也。心たけ〳〵しく家事の事ハ元よりうち〳〵にハおほやけの事にもたづさハりて

(17) 親族の人たちハミな困したる事にて御勘定奉行うけられし時なと八七□は奥方のかげにて氏役をつとめらるゝなど世人そしりし程也。千石衆の三枝某の娘にて学文もありし人のよし也」
と記す。文化四年、江戸から京への紀行である。

(18) 天和元年作、享保二年刊。神宮文庫の板本には「井上氏通女十六才の時讃州丸亀より東武への日記也」と書肆の説明がある。
「帰家日記」と共に女流紀行中最多数の写本板本が現存する。清水浜臣が白拍子武女の作として紹介したことから作者及び制作年代について当時から諸説があり、鶴舞図書館の写本には万治三年作かと添書がある。又、岩瀬文庫蔵の板本には、三浦千春説として、作者は尾張藩主宗春の妾で新吉原の遊女於春、父は鈴木某との書入れがある。しかし「名古屋叢書文学編」の解題は、宗春妾では年代があわぬとし、武女は尾張吉通夫人瑞祥院に仕えた人で享保五年作とする。なお蓬左文庫の細川要斎書入本には裏表紙に「嘉永子春早川正承ノ釈正名カモタル旧本ヲ以クラヘ見レハ百五十ケ所斗ノタカヒアリソハ浜臣カヒキナホセレハナルヘシコノウチイサ、カオモ(マヽ)スジアリテ四ケ五ケ本トシルシテ書クハヘオキヌ大カタ本ノマ、ニテハトヽノヘリトモオモホエスヒキ直シカタモメツベシ」とあって、浜臣が校訂した板本との異同が数ケ所にわたり記される。それによると浜臣は「いやしき」を「わひしき」に、「かよひ」を「およひ」に直すなど、婉曲的で暗示をきかせた文章にしているようである。板本の多くは青か黄の表紙で、末尾に広告と、小林新兵衛・英平吉の二書肆名を記すものがある。

(19) 「出羽三山・越中立山・加賀白山・富士山そのほか、山伏の道場であって霊山といわれるものの大半は女性の登山を認めなかった。霊山のほか一般の社寺の中でも女性に対して固く門を閉ざした所は少くないが、そのうち最も有名なのは高野山であった。」(新城常三氏「庶民と旅の歴史」)

(20) 「名古屋叢書文学編一」に解題あり。宝永八年六十八才で歿した作者の三十～四十代の紀行及び日記。鶴舞図書館の自筆本は戦災で焼失、現存しない。神宮文庫の写本は享保十九年源幸混の後序がある。

(21) 安永六年、伊勢から紀伊半島北部一帯を旅した紀行。夫と同行し娯楽的要素が強い。国会図書館の写本は『荒木田麗子著述書』中の一本である。

(22) この様な事態は男性紀行にもないわけではない。しかし女性紀行ではそれが一般化している。

(23) 中野三敏先生蔵。安永六年春江島参詣の紀行。『青葉山路』と作者は同一。

三、女性紀行の世界[注24]

前章で述べた状況は交通史・女性史等とも矛盾せず事実に近いと思われる。とすると、男性紀行の多くが作品中にとりこんだ土地の人々との会話に基いて採取した記事は、女性紀行の場合、かなり得にくかったであろう。彼女らと土地の人々との間には常に一定の距離があったようである。

だがこれは彼女らの姿勢にも起因する。

彼女らの土地の人々との接触の機会は、毎日の宿での主たちとの会話が中心をなすはずである。が、彼女たちの紀行文が宿の主人等に対して見せる共通した反応は、卑しげなひなびたものへの敵意にも近い嘲笑と失望、みやびなものへ対する共感と満足にとどまる。

伊香保の宿で主人に源氏物語等の草子を見せてくれと頼み、それが通じなかったことに大笑いしたり(中川久盛室『伊香保記』[注25])、思いもかけず風流な歌を書く姉妹に巡りあって感動した後、その姉の夫が「いたくきたなげなるものを着て」「見驚くばかり似げなくぞ侍る」のに幻滅したり(油谷倭文子「伊香保の道ゆきふり」[注26])するのをはじめ、彼女らの宿や主に対する評価の基準は、すべて外見の清々しさ、歌を詠じ琴を弾ずる風流さ等にある。田舎に思いがけぬ小綺麗な住居、みやびな人、これ以上の感動と賞讃はありえないかの如くである。たまたまそ

うでない宿は、彼女たちにとって失望と軽悔の対象でしかない。

「家のさま、あるじの気はひ、世にたくひなきまでひなびていぶせさもなべてならず（中略）よろづ浅ましうて（中略）浮世の中にはかゝる所もありけりとあざみあへるのみなり。」（『初午の日記』）

男性紀行の作者たちの様に土地の人々の話を聞き、その土地の現実に直接ふれていくことを望むのではなく、風流で美しい宿とそれにふさわしい主を求め、そのイメージからはずれるものには興味を示さない彼女らのこの様な態度は、何に基くのか。おそらく彼女らが無意識に作り出した自らの世界の中で、紀行文を書き、旅をしていることによるだろう。「伊勢物語」「源氏物語」をはじめとして、「更級日記」「土佐日記」「十六夜日記」等の昔物語や古い紀行文の世界が常に彼女らの作品の枠を作っている。

これら中世以前の諸作品は男性紀行にも多く引用される。だが問題は女性紀行の場合、単なる語句の引用だけでなく、文脈にとけこみ全体の雰囲気を形成するものとしてそれらが使用されることにある。

「かの在原の中将の遠近人のと口ずさみ給ひにし浅間の嶽に立つ煙も」（『伊香保記』）

「五節の君のひきとゞめらるといひけむこそいと思はるゝ」[註27]（「東海紀行」）

「時しらぬと昔の人の詠めけん雪さへ今も見ゆれば」（「帰家日記」）

「かゝるそゞろごとは源内侍などこそいひつれと悪むに」（「庚子道の記」）

「左の方山川の流れいさきよく水の面にいくらも立る岩ほどもにあたりてくたくる浪けにすいそうにはいとよく似たる」[註28]（『岐曽路日記』）

「阿佛尼の昔幾瀬の数も及ばじと詠じ給ひけん殊に此身にぞ各思ひ出たる」（「奥のあら海」）

これらは単に知識を示さんがための語句の使用で男性紀行にもよく出る。数も多数にのぼる。しかし、たとえば次の様な長文を用いて昔物語と共通もしくは対照する場面を表出して楽しむが如き傾向は単なる知識顕示とは言い難い。

「旅人のをのこた、一人かたハらをゆき立帰り行よとうらやましく過行かたのといひしも今更のやうにおほえ侍るをりしも友なるわらハへと母いふをきけハしりたりし人のもとつかひしものとなむいふにいとふるきことの恋しき」（徳川春子『高原院殿御道之記』[註30]）

「あやしき童どもの熊手持ち籠おいたるが所々に散りたる木の葉かき集め松の落葉ひろひたるさまたゞ住吉物語の絵を見ん心地す」（『伊香保記』）

「所のさまいたうひなひていふせけなるわら屋の軒端ハ忍ぶ草にやつれ八重むくら門をとちこめてはかなくかこひなせる紫の袖垣ひまおほきにあをやかなるつゝらの心ちよけにはひかゝれるを何そとゝへハこれなんしろく咲る夕かほ也と里のこのこたふるにかの五条わたりのあはら屋も思ひよそへらる」（侍女豊崎『湯本の記』[註31]）

「あはれなど言ふ程に木のもとにわらはべ数多より来て長き

しもとどもをもて打散すめるは帳のかたびらおほはまくし給ひけんをさなごもおはせしぞかしなどいひて人々にくむ。」（「伊香保の道ゆきぶり」）

「十日とく立出て大和路にゆかんとする道の辺に杜若いと面白く咲きたりける何となう目につきて思ゆれどきつゝなれにしなといふべくもあらずさのみ故里の恋しさも思はねど日数のこよなうつもりぬるのみなん驚かれてゆきぶりの口ずさみにかきつばたの文字を句のかしらにおきて

かりそめにきつと思ふを月日さへはるかになりぬ旅の衣手」

（『初午の日記』）

「とかうみじろくほとにすこしまどろむとすれは海ちかき所にて暁のあらしにめをさましつ、すまのすまひもふとおもひ出らる。」（杉山廉女『おそざくらの記』[33]）

「夢にも人に会はぬとは昔の程ならん、けふはことに晴わたれば往来いとしげし。僧の鼠衣きたるがふたりと逢ひたれどしるべならねば故さとの文のつてもかきたへたり。」（『たびの命毛』）

更に、明らかな引用とは異るが、何となくそれらしい場面を作り語句を用いて、古い物語や紀行と類似の雰囲気を作ろうとする例が多い。

「かの里に着きて（中略）清げなる家にとまりつ。（中略）あるじが娘とていと美しき子のまみ口つき愛敬つきて髪ふりわけのほどなるが白き衣しどけなく着なしてくちの方より走りもてきたり。」（『伊香保記』）

「とし比つかひなれしわらはのわかれをしみてこゝまてきたりけるか是よりかへる。へたてなくかたらひける人のもとにせうそこす。」（『あつまのゆめ』）

「或夜さり雨風烈しう物騒しき心地するに神さへおどろ〳〵しうなり出たるぞ、思ひ掛けねば打驚きて堪へねばふとうつ伏したる侭に頭の上とも何とも思いあへずひし〳〵としつるは魂今ぞ失せぬると思へり。」（「伊香保の道ゆきぶり」）

「今宵は沼宮内の駅に泊る。端近く円居して（中略）打詠むる月の光はいたう哀に照増たる。唯来し方行末をのみ思ひ出る中にも果敢なき女君の御事の怪しう慕はれて打泣かれつゝ」（「奥のあら海」）

「おもひの外にらうがはしう田舎の旅人あまた来あひて夜もすがら何ごとにかおのがしゝさへづりかはしつるや、蜑の子にこそはとおぼえて耳かしかましう、用意なきふるまひのめざましう心ゆるびだにせられず露まどろまれぬまゝに」（『初午の日記』）

「三日は桃の花もてあそぶ日ぞかしと思へど旅人はいつともわかぬやうなり。」（『後午の日記』[34]）

「賤が垣ねにしろくさけるは何の花ぞと見るを卯花ゆきかとまで咲みだれたり。」（『たびの命毛』）

しかし、この様な昔物語との一体化はまだ部分的で表面的である。女性紀行はより全体的な構成において古い物語や紀行に基く一つの型を利用している。[35]

それは、女性紀行に頻出する次の様な諸点である。

①「やむをえない旅」を強調し、旅の苦しみを前面に押し出す。

②立ち去る土地かその近辺で父母、配偶者、子、主君等近しい人物が死んでいる。旅の途中でともすればその死者を想起し涙する。

③目的地に家族もしくは旧知がいる。又は単に故郷を懐しみ目的地に近づくにつれて人や土地との再会の喜びを感じ出す。

これらがたとえ客観的事実に基くものであったとしても、あえてそれを強調し工夫をこらして綴る所に彼女らの紀行文観はうかがえる。「土左」「更級」「十六夜」等から導き出した一つの「旅」のイメージにあわせて彼女らは旅をし、自らを既知の物語や紀行の主人公に擬して紀行文を記す。したがってその構成を著しく傷つける存在は認めたがらない。

先に名所を見ようとする彼女らの熱意について述べたが、その名所はいずれも古来有名な歌枕や寺社にとどまる。又、いったん名所に訪れ、寺社で宝物等を見た際は、ただ感動するのみで、男性紀行にしばしば見る批判や疑問は皆無に近い。

「今ひとしほ有がたく覚えて」（『伊香保記』）

「ありかたくてそゝろになみたこほれける」

「皆かんに入泪をなかしける」

「たうときことゝもをおかみていけるよをうれしとそおもふ」（『あつまのゆめ』）

「すゝろはしき涙もとゞまらす」（『初午の日記』）

といった状態である。

女がさかしげに[注36]批判等を行うのが当時の人々に歓迎されなかった点もあろうが、同時に彼女らが作りあげている紀行文の世界の中では、この様な場で疑問や批判をさしはさむ事は適当ではなかった点もあろう。

それに対して彼女らが力を注ぐのは、風景や旅の生活の細かい描写で、それらの具体的で精密な表現に、彼女らは情熱を見出しているかのようである。

「薄高くしげりて輿の簾にさら〳〵と音するだにもめづらかに覚えける。」（『伊香保記』）

「大路はだれに雪今もふり（中略）松の上などはさらなり、刈田の跡あやうき家のかきさへいとをかしと見ゆ。このもかのもたゞ白妙なるが朝の光にまじはりあひたるたとへん方なく我世の外にゆくこゝちす。」（「東海紀行」）

「あつかりし名残むつかしければ河水をくませてのむに猶ぬるければ捨てつ。舟のそよ〳〵となると聞きて戸を開きてみれば芦の茂りたるを分け行くなり。（中略）蚊のいとおほくて扇をはなたす手馴しをれば打ちまどろむべき暇もなし。」（「帰家日記」）

「なには橋とかやさま〴〵なる名の橋どもかずかず多かる下をゆくは柱にさはりもやせんと危けれど近くなるまゝに広らかに見えて安くとほりぬ。」（同右）

「いたゞきには雲のたなびきて肩のほとりより雪いと白うかゝり裾はすべてみどりに見ゆめり。今めきたるすそごの几帳など立てらたん様の筆にも言葉にもいひつくしがたきけしきなり。」（「庚子道の記」）

「上より流るゝ水のおちかゝるわたりはたゞ白絹をあまた引ちらしたらん心地して白玉の散乱るゝさま似るものなく面白し。」（『初午の日記』）

「今日行所ハ芝生うちつゝきれん花草なと咲ミちし中に黄なる小草の花もみとりにましりて秋の野ならぬ錦をしく。」（『青葉山路』）

「卯月のけしきしるくなからばかりより雪は消て白き糸を引くだしたらんやうに見ゆ。ましろなるいたゞきも只白きにはあらで白きが中に濃淡あり。高きと低きとくだりにすじを削成せる。たとへば白芙蓉の辨の白きすじを引きたる如く也。[注37]」（『たびの命毛』）

表現の巧拙はともかく、この様な細かい熱心な描写は男性紀行には少い。一つの定められた枠の中で、それにふさわしい題材を選び、予定された感動にひたり、細部の描写に心を砕く、というのが、彼女らの基本的な紀行創作の姿勢である。

註

(24) 「世界」の語は近世文学の上で歌舞伎や戯作において用いられるものと勿論同一ではない。紀行文作者たちにその様な意識があったとは思えぬ。だが結果として共通する面も持つ用語として使用する。

(25) 寛永十六年伊香保湯治の紀行。乾々斎文庫の写本は『伊香保道之記』（内外題共）。「女流文学全集」は『伊香保記』とする。

(26) 宝暦頃の作、寛政二年刊。「女流文学全集」による。

(27) 源氏物語須磨巻五節の歌「琴の音にひきとめらるゝ網手なはたゆたふ心君しるらめや」

(28) 伊勢物語九段「時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪のふるらん」

(29) 更級日記「たぎりて流れゆく水、すいしやうを散らすやうにわきかへるなど」

(30) 寛永十一年、名古屋から江戸への紀行。鶴舞図書館の写本による。

(31) 貞享四年、山城の温泉に湯治した際の紀行。作者は後水尾院女三宮侍女豊崎。内閣文庫の天保十四年写の奥書の写本による。

(32) 匂宮のこと（源氏物語幻巻）

(33) 天明年間、温海入湯の紀行。片道九里程の旅。「荘内叢書」第一集による。

(34) 『初午の日記』と同様に荒木田麗女の作。天明二年の遊覧記で行程も前作とほぼ共通する。『荒木田麗子著述書』所収。

(35) 紀行文は事実に基くものだからこそ一層、その事実をどう表現し構成するかという作者の構想を必要とする。優れた紀行と当時賞讃され今日残る作品の多くは作者の意図した一定の筋を持つ。だが男性紀行の場合、その筋は多彩で、殊更一切の筋を廃したものも多い。

(36) たとえば菊池民子『江の鳴の記』（文政四年の紀行。慶応大学に文政十年の写本あり）で作者は浦島の子の塚について真偽を考察した後に「こは我ながらすゞろにもあるかな女の才がりさかしだちて声したゝかに論ラフハいとにくきものとなん紫式部のかへす〳〵もいさめ置たりしものを」と述べている。この他にも「女は疆をこえず」「女のほこりかなるは人のにくむ」（いずれも「庚子道の記」）の語がいくつかの女性紀行に引用される。

(37) 加賀文庫所蔵の写本に附された君山批評はこの部分を「比喩至妙」と称える。

四、女性紀行の位置と当時の評価

紀行文の伝統が「土左」「更級」から「海道記」「十六夜日記」にいたる流れとして近世の人々に意識されていた以上、その世界に基いて紀行文を記すことはむしろ自然であった。しかし、現代と比較すれば種々の困難を伴うとはいえ、中世以前に比すれば遙かに楽になった交通事情の中で、旅はかつての悲劇性と特異性を失い、以前と同一の基盤にたって紀行文を綴ることは不自然となる。だが女性の旅には中世以前の困難さが依然存在し、社寺参詣等に関しては後退さえ見せた。

古い紀行の心情と構成を支えた、旅そのものの特殊性や悲劇性を女性紀行はなお利用し得たのであり、それは時には旅の現実に目をつぶり、体験を自己規制する役割をはたすとしても、

彼女らが作品を記す際に選ぶ手法としては最も無理のない自然なものであった。

彼女らの作品の評価も又、その様な観点からなされている。

「いかほの御紀行ハ（中略）光顕院尼公の御筆記也。いさよひ更科にもおさ〳〵おとるましくいと〳〵めてたし。」（乾々斎文庫写本『伊香保記』末尾、天保四年七月批評）

「さるは蜻蛉紫にほはしき筆ずさみにもはぢずまた更科十六夜のあてなる口つきにもおとらぬはいとこそめづらかなれ。」（「庚子道の記」村田春海序）

「高於紫女秀於清才力縦横馳彩筆（下略）」（加賀文庫写本『たびの命毛』君山書入」）

「旅の記はしもおほかれど。土佐の日記をこそ。親（オヤ）とハすめれ。（中略）さてハ。女のすさミに物せしは。いさよひ。更科の記。なンどのたぐひにて。（中略）さるに此江の嶋の記よ。打見るに。いにしへの心ことはを。我物になして。目とまるべきふし〳〵多く。」（慶応大学写本『江の島の記』文政十年序）

近世という新しい条件下で新たな方向を模索し続けた男性紀行に比して、昔ながらの紀行の伝統をごく自然に踏襲した彼女らの紀行は、その様なものとして理解され評価されたのであった。[註39]

註

(38) 芭蕉「笈の小文」の冒頭の一文をはじめとして、それを示す記述は多い。

(39) ある意味では紀行文制作に有利なこの制約を女性紀行の作者たちが意識して利用したかどうかは早急に結論し難い。『都のほり道の記』（享和二年、土居美明女の江戸から京までの紀行。東北大学狩野文庫に写本が存する。なお同文庫の『西上日記』も内容は同一）や『たびの命毛』冒頭の客観的状況とは矛盾するような悲劇的な筆致には意図的なものもうかがえる。が、文学的意図というより、たとえば娯楽中心の旅に出立する『初午の日記』の作者が旅立に人目をしのんだり、『胡蝶日記』（白井千代梅作、文化年間象潟遊覧紀行。「荘内叢書」第一集による）が末尾にすべてが夢だったと虚構しているのと共通の意識、即ち女性の旅に対する世間の批判への一種の弁明の可能性もある。

五、一定の試み

以上は近世女流紀行文学の基調であって、現実には、個々の紀行の一部分又は全体として、変化や発展への試みは見られる。

「伊香保の道ゆきぶり」は優雅な文体に地名への考察、民俗学的考証を織りこむ[註40]し、『初午の日記』『後午の日記』は悲劇性を排除して娯楽的性格を強調している。只野真葛『磯つたひ』[註41]は土地の人々から聞いた四つの説話を並べて紀行文とする破格な体裁をとり、古い物語や紀行の雰囲気を残さない。幕末の野村望東尼『上京日記』では作者は旅の主導権を握っており、遊女町で男と思われて遊女に誘われ「ひとりも心にかなはぬ」と笑って帰る体験を記し、著名な社を拝んでも「宰府には劣れり」と片づける。

男性紀行とは比較にならぬ微々たるものながら彼女らにもそれなりの模索はあった。しかし結局、近世を通じて女性紀行は旅に対する受身の姿勢と古い紀行の伝統とから脱することはなかった。男性紀行が近世後期にいたって作りあげてゆく、土地の人々への知識と観察を主眼とした地誌的な紀行文を、女性紀行は最後まで持つことなくおわる。その種の紀行文制作に必要な豊富な知識と旅の体験の少なさは、あまりにも絶対的なもの

であったし、その様な紀行を女性が記すことを社会も歓迎しなかった。彼女らがその様な中で、全体として、精密な描写と古い紀行の伝統の継承に傾いていったのは当然の結果であったかもしれない。

註

(40) 一般に短距離の保養旅行はごく初期から娯楽性の強い明かるい紀行を生んでいる。この種のものは時代が下るにつれて旅を楽しむ姿勢が一般化する。しかしそれらも結局は美文を連ね古い物語に似た雰囲気を求める。

(41) 文政元年作。天理図書館に馬琴の写本が存するが未見。学習院大学の写本は『雎鳩居叢書』の一部。